

---

# スモーキークォーツ

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スモークークオーツ

### 【Nコード】

N0130X

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

新宿の雑居ビルが立ち並ぶなか、佐木田英輔のスリーエス事務所がある。今日の依頼主は矢野久美だった。

「鉄骨の回廊」「雨にぬれた綿毛」の佐木田英輔シリーズ第三弾です。

## プロローグ

新宿は夜になれば華やかな街に変わる。

さきたえいすけ

そんな歓楽街の少し奥まったところに佐木田英輔さきたえいすけのスリーエス事務所がある。便利屋なのだが、黒い裏稼業にも精通しているから、いろいろなところから依頼は来る。一番の依頼主は久ちゃん。

今日も佐木田は暇で朝からぼーっと過ごしていると久ちゃんから電話が入った。

「ねえ、英ちゃん、ちよつと来て」

「おー、いいとも」

喜んで出かける。

出かける前には栄養ドリンクを一本。

「うまい！」

久ちゃんは四〇が目の前。それでも、気立てのいいホステスだ。最近は少しふつくらしてきて本人はダイエットをするというばかりで、一つも長続きしない。だが痩せたホステスなんて面白くない。佐木田はトントンと足取りも軽く上がっていくと、久ちゃんが立っていた。

「おやおやお出迎えですか。さあさあ、部屋へ入りませよ。どこのマッサージしようかなあ」

「英ちゃんたら違うわよ」

「何を照れてるんだよ。ドリンクも飲んできたんだから」

佐木田は背中を押して部屋へ入る。

久ちゃんの丸い乳房にワンピースの開いた胸元から手を入れる。

「違うんだったら」

「何だよ、今日はいいいんだろ。それともアンネの日記か」

「もう、そんなふざけた話じゃないの」

嫌がるそぶりを見せながらも、体を触ることは許してくれる久ちゃん。

佐木田が久ちゃんを後ろから抱きながら尋ねてみる。

「ホントに仕事の話か」

「うん。うちのすみれちゃんから頼まれたの」

「ふーん」

そう言いながらも後ろから乳房を触る左手を休めない。右手はさらにショーツへと伸びていく。

「ちよつと、触られたら落ち着いて話ができないじゃない」

「ふんふん、そうなんだねえ、久ちゃんここは？」

「嫌だったらあ、英ちゃんたら」

そう言いながら振り向き、唇を塞ぐ。

ピンポーン。

「何だよ」

「忘れてた、すみれちゃんよ」

「後にしてもらおうよ。ホラ、俺だってこんなに」

「ダメ」

久ちゃんは立ちあがってドアへ向かう。

佐木田は思い切りテンションが下がって不機嫌そうに寝転がる。

入って来たのは、三〇くらいだろうか、痩せたホステスだった。

佐木田の好みではないが、顔立ちは整っており細面にショートの髪が余計に小顔に見せた。目は切れ長で日本的な美人だ。和服でも似

合いそうだ。

「こんにちは」

「あ、どうも。佐木田です」

「私、矢野花絵やのはなえです。店ではすみれって名前ですけど」

久ちゃんはキッチンに立ちコーヒーを入れている。

「私に何か用があるとか」

「ええ、佐木田さんのお力をお借りしたいんです。弟を見つけてください」

「捜索願は警察の方が早いかもしれませんよ」

「ええ、でも弟は死んだことになってるんです」

「は？」

矢野花絵には三歳下の弟正勝まさかつがいた。弟は高校卒業すると、姉のいる東京に来て働きだした。初めは焼肉店の厨房に見習いとして入ったが、いつの間にか仕事が辛いとか言って、パチンコ店、スナックというように落ち着かなかつた。だんだんと姉にも借金するようになり、四カ月前から行方も分からなくなった。

最後に会った時、真剣な表情でさらに二百万の借金を申し込んだ。今までで百四十五万貸していた。久美にしてもそんなに金があるわけではなく、無理だと突っぱねると泣いてこう言ったという。

「姉さん、この金がないと俺は殺されるかもしれない」

「一体何をしたの。誰に払う金なの」

「人を撥ねたんだ。それが社長の息子だった。でも、どう見てもあつちが飛び込んだできたんだ」

「交通事故なの？ その人は無事なの？」

「ああ、無事どころか酒も飲んでるよ。それなのに金を要求されてサラ金でも借りて今まで百五十万払った。だけど、仕事ができないからってさらに二百万。その親父が貸しビルも持つてるとかで。この間俺の勤めてる居酒屋にやって来たんだ」

大事な息子に怪我をさせた上に、息子の仕事ができなくなったからその保証金を出せというのだ。金はないから待つてくれるように頼むと、その社長は連れてきた男たちに店で暴れさせ、脅しを掛けたという。店長はすぐに正勝を辞めさせ、二度と来ないでくれと追い出されたというわけだ。

「それで、弟さんが死んだというのはどういうことですか」

「ええ、行方不明だからと警察に行きました。すると、一週間ほどして、警察から電話がかかって来て焼身自殺した遺体が見つかったって」

着衣や、時計、靴、運転免許証も弟のものだったという。車のそばには遺書も残されていて弟の筆跡だったそうだ。

差し出された遺書にはこう書いてあった。

「姉さん、もう生きていくのが嫌になりました。ごめんなさい」  
確かに弟の字だという。

「うーん、それなのに、生きてるといふのはどういふ根拠があつて」  
「ええ、電話がかかつてきたんです。姉さんって」

「新聞にも出た後だったからおかしいと思つて、警察に行つたんです。でも、証拠がなくなしくもいたずら電話かもしれないと言われて」

だが、佐木田は首をかしげた。

もしも弟が死んでいないのなら、死んだのは誰なんだろうと。弟を生かしておく必要が誰にあるんだろう。弟の狂言なのか。

「お金はここに二十万あります。もし見つかったら、さらに二十万お支払いします。交通費など十万お渡しします。これで見つけても  
らえませんか。貯金はこれしかないのです」

佐木田は花絵を見つめて、わかりましたと言つて受け取つた。

花絵が帰ると、久ちゃんがすり寄つて来た。

「英ちゃん、引きつけてくれてありがとう。続きする?」

「うーん、その気はなくなった。金のために働くぞ。じゃな」

「意地悪」

佐木田はドアを閉めて、トントンと階段を下りて行つた。

## 第一章

佐木田が向かったのは藤原組長の事務所。

組長はこの裏社会にどっぷり漬かつてはいるが、昔堅気のやくざでいきつけの喫茶店「梓」の常連客だ。

ときどき情報を教えてくれるので、スリーエス事務所としては報酬を払わなければいけないくらいだが、そこはお互い大人の付き合いがあるとしたものだ。

「こんにちは、組長いる？」

「ああ、佐木田さん。組長は昨日から病院です」

答えたのは若頭の遠藤だ。

「どうしたんですか」

「盲腸ですよ。早く病院に行けばよかったのに我慢してしまって腹膜になりそうでしたよ」

「それは大変だったね、どこの病院？」

「あの高橋病院です」

「え？ あそこだけはイヤだって言ってたのに」

「ええ、でも、急だったんで仕方なしに」

高橋病院の院長は組長の同級生で、お互いが頭が悪いと悪態をつくほどの友だちなのだ。

「それで、いつ頃退院できるの？」

「院長は四日ほどという話でしたが、組長は保険で稼ぐって」

「ははは、流石によく考えてるなあ。じゃあ、面会はできるのかい？」

「ええ、明日なら」

「ありがとつ、明日花束を持って行くわ」

「ありがとつございませす」

事務所を出ようとしてふと引き返した佐木田。

「ねえ、この人知らない？」

花絵から預かった写真を見せた。

「若造ですね。なんかやらかしたんですか」

「うん、死んだことになってるんだけど」

「ということは生きてるってことですか」

「うん、そうらしい」

「うちの若いもんに当たってみましょうか」

「お願いできるかな」

「お安いご用ですよ」

佐木田は正勝の名前も後ろに書いて渡した。

事務所を出ると、梓に行った。まだ、朝から何も口に入れてはいなかった。

梓は挽きたてのコーヒーの匂いが店に充満していた。ママの梓は手際よく卵トーストを作っている。

「ママ、僕もモーニングちょうだい」

「ごめん、英ちゃん。今日はトーストがこれで最後なのよ」

「えーっ、僕の分取ってくれてないの」

佐木田は怒ったように言う。

「だって、大学生のアメフトクラブがいっぱいやって来てね。さっき帰っただけけどモーニングのお代わりってみんなが食べちゃって」「学生がこんな喫茶店に来ちゃ困る！ 一人一食だろう、普通は！」

意味不明な事を言う佐木田。

すると、ママはこっそりクロワッサンを出した。

「これでもいいかしら、どうぞ」

「お、クロワッサンか」

途端に機嫌が直る佐木田。

「昨日、デパ地下で買ったのよ」

「コーヒーとゆで卵も差し出すママ。」

「野菜サラダも無くなったけど」

「いやあ、これだけで十分さ。ママは俺に惚れてるね」

それには答えず、洗い物をし始める。そこへえりちゃんが帰って



来た。このえりちゃんは先月から梓でバイトをしている女子大生。朝十一時までのバイトだ。モーニングを近くの店に届けに行っていたらしい。

「佐木田さん、おはようございます」

「お、えりちゃん、いつもいても可愛いねえ」

話は半分に聞いておきますと言われてしまった佐木田。ママは笑っている。

佐木田はコーヒーを飲み終わると、スリーエス事務所を開けた。

住宅兼事務所なので、いつでも開いていると言えばそうだが、一応気分的なものだ。

机には配ってと頼まれてるティッシュが山盛り。

これは梓の入り口にも置いてある。どこで配ろうと構わないのだ。隣のパチンコ屋にも置かせてもらってる。それで金を取るのかと言われそうだが、それでもいいのだ。サラ金のティッシュスーパーなんてそんなものだ。

ティッシュで思い切り涙をかむと、電話が鳴った。

「もしもし、スリーエス事務所です」

「あの、うちのミーコがいないのよ」

「ああ、寺田さん。また逃げましたか」

近くのばあさんの飼い猫だ。あちこちに子どもを作る浮気な猫だ。もともと野良猫だったものだから、ばあさんは飼い猫と違っていても、ミーコにしては全くその気はないのかもしれない。だが、この猫を見つけて連れて行くと一万円なのだ。高い料金設定は人を見て決める佐木田だ。このばあさんの頼み事は寺田宝石店に請求することになっている。嫁はエステ通いではあさんを疎んじて、もともとは同居していたのに別のマンションを借りたのだった。夫は若い妻に何も言えず、金で繋ぎとめてるようなものだ。だから、佐木田はこのばあさんの依頼は快く受け、金はしっかり受け取るのだ。

きつとあそこの公園だなど目星をつけて自転車で行く。

「いろいろな依頼を一手に引き受けるすごい腕だな」  
自分で自分を褒めるしかない。

「ミーコ」

探しながら公園を見まわす。繁華街の公園なんて汚いものだ。あちらこちらに酔っぱらいのおう吐物があり、金の無い若者のコンドームが落ちてている。

「みゃー」

ミーコの声がある。

捨て猫を連れて歩くミーコ。オスなのにミーコと名付けられた猫は雌猫を連れて出てきた。

「おい、また相手が違っぞ」

「みゃー」

「くそ、この浮気猫め」

そう言いながら自転車のかごに乗せる。

持ってきたシーチキンの缶詰を開けて、雌猫に渡すとミーコがみゃーと鳴いた。まるで礼を言ってるようだ。

「ふーん、お前もいいところあるじゃん」

佐木田は寺田宝石店にはこの缶詰の値段を三千元と報告することに決めた。

## 第二章

翌日、寺田宝石店から電話があった。

「もしもし、佐木田さん、寺田です」

「はいどうも」

あの缶詰が高いつて言うのかなあと少し姿勢を正して、受話器を持ち換える。

「あの、母のことではなくて、頼みたいことがあるんですが」

「えっ、なんかあったんですか」

「ええ、ちよつと電話では」

「では、後で伺います」

そうか、宝石店の依頼ならかなりの料金が見込めるなと佐木田は取らぬ狸の皮算用だ。

すると、ケータイも鳴る。

「あの、矢野花絵です」

「あ、花絵さんですか。まだ、捜査中で」

「ええ、いいんです。私、明日から大阪へ行くので報告だけしておこうと思ひまして」

「あ、そうですか。旅行ですか」

「ええ、まあ」

「お気をつけて」

電話は切れた。別に放つてゐるわけではない。若頭にも頼んでいし、今日は居酒屋へも行く予定だった。だが、花絵は待っているんだろうなあと思うと、佐木田は腰をあげた。

まずは、寺田宝石店だ。

最近改装して若い子も入るようになった店だ。店内はブランドの宝石が主流だ。夜の蝶が旦那に買ってもらうことが多いから値段もなかなかハイレベル。かといつてお手頃の若向きのデザインも置いてある。寺田宝石店はこの不景気の中、結構儲かっているようだか

ら、あの男は経営手腕はなかなかのものかもしれない。

ガラス張りの大きなドアを開けると、紺の制服を着て白い手袋をした売り子が白髪のお紳士に金の大きなブローチを見せているところだった。

「いらつしやいませ」

寺田は佐木田を見ると、笑顔で近寄って来た。

「すみませんね、わざわざお越しただいて」

「いいえ、繁盛しているみたいですね」

「そんなことはありません」

そう言いながら佐木田を奥の部屋へ通した。

大理石の床に高そうなソファ、大きなサイドボードにはコレクシヨンの腕時計が並んでいる。

「ほう、ロレックスがいっぱいだな」

佐木田はこういうものには全く興味がなかったが、一応は羨ましいそぶりも見せる。

「実は家内が家を出まして」

「え、家出ということですか」

「まだ、そこまでは」

歯切れの悪い言葉だ。多分あの若い妻は男でもできたのだろう。

「いつからですか」

「昨日です」

「あ、それじゃ、まだわかりませんね。飲み過ぎてどこかのホテルに泊まってるかもしれないし」

「ええ、そういうことも考えられますが」

「でも、家出だと思つのですね」

佐木田は寺田の顔を見ながら聞いた。ときどきため息をつきながら話す寺田は、五十歳になって初めて結婚したのだった。結構女にはモテると思うが、縁がなかったのかそれとも世間体だけで結婚したのか。そう考えるのには噂があったからだ。寺田宝石店の息子は男好きだという噂。

必死になつて母親が見合いを勧めたが、どれも断つて困るという話は梓で聞いたことがあつた。

だが、結婚してからはあの奥さんと仲良くやってるから、男好きではなかつたのねとママも言つてたっけ。

ぼつつとそんなことを考えていると、寺田は立ち上がつて一枚の紙を出した。

「これ見てください」

それは妻からの離婚届だつた。

「もう判も押してます。でも、そんな話全く出たことがなかつたんです。信じられません」

「これはどこに？」

「家内のクローゼットの中に」

よく見ると、日付は書かれていない。ということはいつのことか分からないわけだ。

「奥さんの方にそんな気持ちがあつたということですかね。ちよつといろいろ調べるのに交通費と通信費用がかかります。その分は先に二十万預かります。雑費などもかかりますがいいですか。こういう調査は諸経費が随分と掛かりますけど」

すると、寺田は引き出しの中から百万の札束を出した。

「取りあえず、これだけ先にお渡しします」

佐木田はわかりましたと言つて懐に収めると宝石店を後にした。

これだから寺田宝石店とは縁が切れない。ミーコより難しい調査だが、何だかきな臭い匂いがすると感じていた。

次は居酒屋だつた。そこは正勝が働いていた場所だ。店内は大漁旗が飾られて魚のプラスチック模型があちらこちらからぶら下がり、若者が喜びそうな雰囲気だつた。値段は安く威勢のいい店員が大勢いた。

「店長はいますか」

席に座ると生ビールを頼みながら、佐木田は尋ねた。

「はい、何か御用ですか」

「ああ、ちょっと話があるんで呼んでくれるかな。それと、枝豆頂戴」

「はい、生一丁、枝豆一丁」

大きな声でカウンターに叫ぶ。そして、奥に入って行った。奥から少し胡散臭そうに佐木田を見る男がいる。

「あれが店長か」

佐木田は手を上げた。店長は仕方なくやって来た。

「いらっしやいませ。どういっご用でしょうか」

「バイトにいた矢野君、正勝君のことだけど」

「あの子はうちとはもう関わりがございません」

そう言って困ったように顔をしかめる。

「いやいや、違っんだ。いちゃもんを付けにきたんじゃないよ。お姉さんに頼まれたんだ」

「は？」

「矢野花絵さん。弟を探してほしっって」

「でも、あの子はこの前焼身自殺したとか」

「うん、らしいね。でも生きてるかもしれないんだ」

ぎょっとした表情で見つめる店長。ネームプレートには中田と書いてある。

「中田さん、矢野君と連絡した？」

「どうしてですか。死んだと聞いてから一切会ってませんよ」

「そうか、でも、忘れてるかもしれないじゃない。思い出したことあつたらここに連絡して」

そう言っつて佐木田はパソコンで作った名刺をを渡した。

「スリーエス事務所ですか」

「うん、僕が所長。まあ、僕しかいないんだけど」

そう言っつてビールをもう一杯と注文した。店長はじつと名刺を見ながら警察じゃないんですねと呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0130x/>

---

スモークークォーツ

2011年9月27日13時34分発行